



# 志度高だより 一飛翔の窓

第132号  
(H23.3.12)

## 「校門」

私はここ22年間校門に立ち続けている。教師としてたいしたことはできなかった。平凡な教師に人をアツと言わせるアクロバットはできない。そしたら地味でもいいからこれと思えること、それが校門に立つことだった。

これはもう自分との闘い。他人の目からすれば、病的ともマニャックとも取れよう。晴れの日も、雨の日も、木枯らし吹きすさぶ冬の日も、まさに宮沢賢治の詩の如く立つ。

自分のことを話すのはどうかと思うが、中年男の冷や水として聞き流して欲しい。私が教師という道を選んだのは、人を育てるという職業は生身の人間を扱うということで、何かしら尊いものを感じたからである。教育の根底をなすものは人づくり。それ以外にない。たとえ国が高度な経済進展を遂げようとも、また世の中が近代化しようが、それを支えるのは人間。教育というのは人間の人格に大きな影響を与える職業。これほど崇高で責任の重い職業があるだろうか。そう考えたとき、就くならこの仕事かも、と思った。

私を教師へと駆り立てた人物が三人いる。三人とも教師だった。

一人は小学校の担任だったA先生。彼のことは尊敬（畏怖ではなく恐れだったかも）はしていたが、ある意味では嫌っていた。まだ小学生だったから、彼の人間性について、彼の教師としての資質について、とやかく言える立場ではなかった。大人になった今になって、それも同じ教師という職業に就いて、初めてその先生のことを冷静に語れるようになった。

A先生の思い出と言え、毎日殴られたという一言だろうか。小学校4年から6年までの3年間、僕たちは何かにつけ殴られた。それも毎日。連帯責任として。例えばこうだ。彼が分数の説明をしようとする。説明が一段落すると演習問題だ。ところが何人かが解けない。すると「全員立て！」となる。それから儀式（負の洗礼）が始まる。男も女も等しく殴られる。顔を背けようものなら、「逃げるな」と倍殴られた。人の能力には個人差がある。しかし、そんなことはお構いなし。彼の哲学は、できなければ殴る。それが彼の流儀だった。それでも僕たちは校長先生にも親にもそのことを言わなかった。殴られても学校には行った。当時は、そういう時代だったのだ。

今でもよく覚えていることがある。月曜日の朝のこと、I君は日記を忘れた。そこで、取ってこい、と言われた。僕と仲が良かったI君は、僕の方を見て困ったような表情を浮かべた。I君は下駄箱のところで少し躊躇したが、運動靴に履き替えると、とぼとぼ家に帰っていった。その日いくら待ってもI君は学校に帰ってこなかった。翌日、I君は教壇の上に呼び出され、みんなの前で見せしめのようにこれでもかこれでもかと殴られた。みんな恐怖に固まっていた。やり過ぎだろう。

そう思った。が、口にはしなかった。言う、I君と同じ憂き目にあっていたらどうだろう。「どうして帰ってこなかった」A先生の怒鳴り声。「日記を書いていませんでした」I君は泣きながら答えた。

私も見せしめに殴られたことがある。音楽の時間だった。担当は隣クラスの女の先生だった。その日はピアノの練習をすることになった。と言っても、音楽教室にはピアノはなく古いオルガンが一つあるだけ。生徒は40人ほど。とても全員が一つのオルガンで練習できるわけがない。練習というのは、女先生の声に合わせて音楽の教科書の裏に印刷されたピアノの鍵盤を指で押さえていくことだった。どんな音が出ているかも分からない。それでも弾けると思った人からオルガンを弾いていった。私は友達に聞きながら手を抜かずに練習した（つもり）。そしていよいよ本番。ところが上手く弾けなかった。それに対し、女先生は「言うことをちゃんと聞かないからよ」と言った。ちゃんとやったのに……。

音楽の時間が終わって国語の時間になった。起立、礼、着席。すんなり授業が始まるものと思った。ところがA先生は私を教壇の上に呼び出し、「何でピアノが弾けなかったんだ」と詰問した。女先生が告げ口したのだ。僕は、練習したんですが……と口ごもった。するといきなりバシ、バシ、バシとビンタが飛んできた。腹の中で、この野郎！と思った。

多分、このとき教師になろうと思ったのかもしれない。むやみに暴力を振るわない教師に。（「むやみに」という表現が心憎いでしょう。無差別じゃないですからね）

恐怖の3年間を終え、めでたく中学生になった。中学生生活はA先生の桎梏から解放されて自由だった。勉強はあまりしなかったが、水泳部に入って記録も伸び、県大会でもいい成績を残した。好きな女の子がいても告白できない、ごく普通の中学生だった。B先生がクラス担任になった。陸上の国体選手で背が高くハンサム。その上数学の教え方も抜群。それに何より生徒の気持ちをよく理



解してくれた。と言っても、怒るときは烈火の如く怒り、けじめだけはつけさせられた。「この先生と一緒に夢が描けそう」そう思わせてくれた先生だった。B先生の後ろ姿を見て、教師っていいな、と思った。

高校に入ってある英語の教師と出会った。生徒の間では「ポケットモンキー」と呼ばれていた。C先生には悪いが、確かに風貌があだ名に似ていた。C先生には英作文を教わった。何のいたずらか、先生の一言が私の運命を変えることになった。3年生の中間試験のテストが返ってきた。点数は75点くらいだったと思う。自分の実力どおりの点数だった。因みに、クラス平均は90点くらい。これもいつもどおり。終了のベルが鳴り、弁当を食べようとしたら、C先生が私を呼んだ。「他のみんなは私の模範解答を丸写しにしているのに、君はどうしてそうしないんだね」ニコニコしながら訊いてきた。「間違ってもいいんです。自分の英語で書きたいんです」生意気にもそう私は答えた。帰り際、C先生は「その気持ちを大事にしなさい」と言ってくれた。

後に分かったことだが、C先生は偉大な詩人であり、詩の芥川賞とも言われる『第1回地球賞』を受賞することになる。高校を卒業してもC先生とはいろいろとお付き合いを頂いた。大学を卒業するとき、私が先生と同じ教師になりますと言ったら、少し考えて「教師か。ちょっとショックだね。君ならもっと冒険ができるのに。広い世界を動き回って欲しいというのが正直な感想だね」と意外なことを言われた。しかし、そのときは「聖職である教師になる」という強い意志があった。折角の先生のアドバイスを聞き入れなかったことを、ときどき後悔するときもあるが、やっぱり教師という道が自分に合っていたと思う。

私には人か睦目するようなどでかいことはできない。だから、ネズミのようにこつこつとできることをする。その一つが校門に立つことだった。校門に立つことで多くのことを学んだ。たかが校門に立つことぐらいで、と思うだろうが、実はそうではない。一つには、自分が決めたことはやる。大袈裟に言えば初志貫徹というやつかな。自分への挑戦だった。二つめは、生徒との信頼関係の構築。校門であいさつを交わし、世間話をする。小さなことだが、一年間続けると結構なものになる。三年ともなれば言うまでもない。爪楊枝の先っぽくらいの塵でも積もれば山になる。校門に立つことで、生徒との関係も随分と柔らかなものになった。「教師は敵だ」から「どうも教師は俺たちの味方らしいぞ」くらいには。

人間の付き合いにおいては、何事もお互いが受け入れる姿勢を持たなければ始まらない。受け入れられるには、まず自分の心の扉を開く。そして開け放した心に相手を受け入れる余裕がなければいけない。こうしてみると、校門に立つのは自分磨きの何物でもない。門扉を開くように心も開く。雨にも負けず、風にも負けず、冬の寒さにも負けずに。

教師が教えることは少ない。いや、この広大な宇宙の広がりからすると、無に等しい。しかし、教師として少しでも生徒の心の琴線をふるわせることができたのであれば、まあ自分なりによくやったな、と少しばかり自分を褒めてもいい。生徒に数式、公式、定理、法則なんかをいっぱい詰め込んでも、それほど喜びは感じなかった。柔道の試合に負け悔し涙を流している生徒に、肩をぽんと叩いて「お疲れさん。お前は俺の財産だ」の一言が言えることの方が何十倍も喜びは大きい。なぜなら、教師という仕事は生徒と真摯に向き合うことだから。

今考えるに、人との出会いの大きさ、それを痛切に感じる。出会いの善し悪しも大事だが、その出会いをどのように自分で咀嚼するか。そのことの方が重要だと思う。なぜなら生きるのは自分。

誰も自分の人生を肩代わりしてくれない。

今になってみると、A先生のことは昔はそういう時代だったんだ、くらいにしか思っていない。憎んでもいない。もしかするとあれは彼の流儀であって、それは私が校門に立つことと同じではなかったかと、むしろ彼の一貫さに敬服すらする。B先生にはB先生なりのやり方があって、C先生にはC先生流のやり方があったように。教師という職業は、**教えることよりはるかに教えられることが多い**。人という生業は、他者から学ぶことなんだろうと思う。

だから、あと三年校門に立つ。それが私の流儀。

長きにわたり「志度高だより」を読んで頂き有り難うございました。残念ながら今回でもって最後とさせていただきます。自分勝手なことばかり書き綴り、なんじゃこいつ、と思われたことでしょう。そのことは自分でも十分に承知しています。ただ、今は皆様方の寛容に感謝するばかりです。最後になりましたが、皆様方の今後のご健勝とご活躍をお祈り致します。 志度高校 校長

